

「今、欲しい物はありますか?」。
路上で生活する男性、いわゆるホームレスの方にその声を掛けたのは今から十年ほど前の二十一歳のころだった。当時の僕は「万引きGメン」というテレビなどでおなじみの特殊な仕事をやる傍ら、東京・池袋で毎週ホームレス支援の炊き出しや夜回り活動などのボランティアに参加し、日本の貧困について勉強していた。

僕自身、親がシングルマザーだったことや裕福でなかったこともあり、世の中の貧困問題の根っこ部分を自分で直接見てみたかったのだ。そんなボランティア生活に慣れてきたある日、初めて会って話し込んだホームレスの方に思わず欲しい物を聞いてみた。

「欲しい物なあ...」。僕は質問を投げ掛けながら「食べ物だろう」と自分の中で答えを用意してしまっていた。ところが、返ってきた答えはまるで違うものだった。

「子供にはなるべく食べさせたくない」

平成二十三年三月十一日のあの日から、僕の古里である相馬市の農業は大きく変わってしまった。お店に野菜が並ぶ人からは「大丈夫なのか」と尋ねられる。「放射能の農作物だから」と直接言われたことが何度もあった。スーパーに野菜を並べられるようになってもお店に県外産の野菜と相馬市の野菜が並べば、ほとんどの人が県外産の野菜を選ぶようになった。

「中国産の方が売れるよ」。追い討ちをかけるようにスーパーの店員からこう言われた。必ず店の商品より二割から三割安く並べないと売れない現状をどうすることもできず、毎日売れ残りの野菜を持ち帰り、自分の家で食べる日々だった。

一番辛かったのは「子供にはなるべく食べさせたくない」と言われた野菜を「うちの子供には食べさせなければ」

「よやくやくこの時を迎えることができず。東日本大震災、東京電力福島第一原発事故から五年以上がたち、僕はようやく相馬市の農業を「ゼロ」に戻すことができました。

その中で僕ら若手が相馬市で農家になる活動していくことはマイナスをゼロに戻す作業であり、まだスタート地点にもたどり着けていないといった気持ちで僕の中でありました。それでも諦めずじやってこられたのは、自分の

民報 サロン

必要な物は何ですか

菊地 将兵



「食べ物あんまり困っていないんだ。東京のゴミ箱にはいくらでも食べかけの物が捨ててある。店のそばのゴミ箱とかいつもある場所を見つければ何とかなるもんだよ」。

意外な返答に少し驚きながら「では何が困るのですか?」。そう催促するように問い掛けた。「欲しい物は靴だ。靴はあつという間にすり減ってくても、靴を買ってお金はないし、靴が二足そろって落ちてることもなかなかないからな」。

想定していなかった答えに、思わず「なるほど」とうなずきながらおじさんの足を見た。確かにおじさんは穴の

空いたボロボロの靴を履いていて、靴底が見せてもろうとペラペラと靴底が剥がれかけていた。

僕は今まで「靴」というものを深く考えたことがなかった。靴はあることが当たり前だったし、古くなってきたら買い替えるのが当然のことだった。まだまだ履けるはずの靴を捨てたこと

民報 サロン

相馬ミルキーエッグ

菊地 将兵



ならない」生活だった。きちんと放射線検査をして数値が大丈夫なのは分かっている。それでも、周りの皆が危険視する状況に、僕自信も数値を信じていることができず、不安になることもあった。辛いと思ったことも何度もあった。

けれど、この他にもどうしけようの卵を餌にも環境にもこだわり抜いて育て、最高のニトリから卵をとりたいと考えた。自然環境を壊し、子供に食べさせることが不安に思われたこの場所だからこそ自然を大切にしていこう、きだと思った。自分の子供に胸張って食べさせられるこの卵は、当たり前のように他の子供たちにも胸張って食べたいというお客さんも増えてきた。「この卵を使いたい」。助産所での昼食にも使われるようになり、あの頃がうそのような広がりを見せている。自家消費に限らず、お祝いの品やお遣い物など、今までの卵では考えられなかった用途としても定着しつつある。

あの当時は確かにつらかったけれど、今うちの子供がうまそうに卵かけご飯を食べてくれる光景を毎朝見るたびに、諦めないで本当に良かったと思う。僕の古里は確かに放射能によって汚され、人々から嫌われた。けれど、その中でも諦めなければ、確かに道はできた。

まだまだこれからではあるけれど、飲食店の方や相馬を訪れた観光客に、地元こんな素晴らしい卵があることを知ってもらいたいと考えている。さらには、日本中の食卓に届けたいと願っている。

(相馬市大坪、大野村農園代表)

民報 サロン

相馬土垂

菊地 将兵



生まれ育った古里が好きだったこと、県内外を問わず、いつも応援してくれた人たちがいたこと。そして、何よりも家族、子どもたちがいてくれたことが大きく僕の背中を後押ししてくれました。

相馬市の農を絶やさず次の子どもたちに託すにはどうしたらいいか。一度壊された古里の自然をもう一度大切にすることはどうしたらいいか。これから相馬市の農産品をみんなに「欲しい」と言ってもらえる日がまた来るためにはどうしたらいいか。その答えの一つとして「相馬にかつてあった相馬だけの伝統野菜をもう一度僕たちの手で復活させよう」と誓いました。

ここにしかない物なら、他県や他国と競い合う必要はありません。相馬市に来てくれたみんなに胸を張って「これが相馬の伝統野菜です」と渡せるんです。

いずれ旅館や飲食店でも秋になれば当たり前のように相馬の伝統野菜が食べられるようになり、手土産としても相馬市の秋はこれだと選んでもらえるようになしてほしい。地元の子どもたちは植え付けから収穫まで畑に来てくれて、学校給食や芋煮会までこの伝統野菜を使って食べるようになってほしい。

たった一つの伝統野菜が相馬のあらゆる流れを変えていき、かけになってほしい。

(相馬市大坪、大野村農園代表)